

十全同窓会会報 177

2021 / 1



目次 | CONTENTS

新年のご挨拶……………02	金沢から世界へ発信……………11	Student Doctor 認定証授与式……………19
就任挨拶……………03	学会報告等……………12	十全昔話……………20
退職記念講演会……………04	病院紹介……………14	学生課外活動報告……………22
受賞……………06	教室だより……………16	学生コーナー……………24
医薬保健研究域AIホスピタル・ マクロシグナルダイナミクス 研究開発センター看板除幕式…10	同窓生の消息……………18	

新年のご挨拶



十全同窓会会長

山本 健

新年明けましておめでとうございます。十全同窓会会員の皆さまにおかれましては、新型コロナウイルス禍にもめげず、ご健勝に新春をお迎えのこととお慶び申しあげます。年頭にあたり、金沢大学医学類・医学系ならびに十全同窓会の発展と、会員の皆さまのご健勝とご活躍を祈念いたします。

さて2020年1月以来新型コロナウイルスの拡がりは留まるところを知らず、この原稿執筆時点で全世界の感染者数は5190万人、死亡者数は128万人に達しています。ご高承の通り我が国の感染者数は11万人、死亡者数は1840人と欧米に比較してきわめて低い数値に抑えられており、臨床現場で奮闘される医師・医療関係者のご尽力の賜物と感謝申しあげます。

コロナウイルス感染対策のために、医学類の教育現場は様変わりしています。伝統的な対面講義に代えて、2020年度春学期(4/20から6/18まで)はすべての講義がオンラインで実施されました。6/19からは対面講義が可能となりましたが、ほぼすべての講義が継続してオンラインで実施されています。定期試験では一部の科目が対面での試験を実施しましたが、それ以外はレポートでの対応となりました。秋学期(9/1開始)は、全学の方針「10月からの講義は可能な限り対面で行う」もあり、対面で実施可能な講義については、十全講堂も活用して対面講義を実施しています。杉山和久医学類長、教育委員会オンラインワーキンググループメンバーならびに講義担当教員各位、学生課職員におかれましては、短期間のうちに教材とオンライン講義環境をご整備いただきありがとうございました。

座学は兎も角、問診や診察の実技など基礎的な臨床手技の研修には、患者さんとの接触が欠かせません。臨床実習では、指導教員及び医学生に次のような対応を求めています。

・指導医師は学生の健康チェックシート

及び健康状態をみて、実習前の14日以内に新型コロナウイルス感染を疑う症状(体温37.5℃以上、呼吸器症状、味覚・嗅覚障害、頭痛、倦怠感や微熱)がないことを確認した後に当日の実習を許可する。

- ・学生はサージカルマスク、フェイスシールドを持参し、着用する。
- ・医療面接、診察、回診見学前後の手洗い、手指消毒を徹底する。
- ・医療面接の際は最低1m以上の間隔をあける。
- ・医療面接または診察は連続15分以内とする。

「臨床手技」と言えば、先日こんなことがありました。早朝のラジオ第1放送で、「医学生が医学教育の現状を全国調査し、患者さんとの接触が制限されるため、臨床手技の研修が不足しているという結果が得られた」というニュースが放送されました。担当のNHKアナウンサーは「臨床手技」を「りんしょう・てわざ」と読みました。辞書には「てわざ」という読みも載ってはいますが、「しゅぎ」がわれわれの慣用読みですね。これも医学方言の例でしょうか。

海の向こうではアメリカ合衆国の大統領選挙2020が行われ、現職の共和党トランプ大統領が民主党バイデン前副大統領に敗れました。トランプは郵便投票に不正があったと悪あがきを続け、未だに敗北を認めていません。本号が皆さまのお手元に届く頃には「まともなアメリカ合衆国」への復興の道が見えてくることを切望いたします。

アメリカは しっかり選べ 大統領*

大国の 狭い心の 大統領*

トランプの 診断名は 狭心症

(* 毎日新聞万能川柳)

コロナ禍が落ち着き、会員の皆さま、母校ならびに同窓会にとって平穏な良い年になりますよう祈念申しあげ、年頭のご挨拶といたします。

就任挨拶



八木真太郎 博士

研究の発展に加え、 高度医療と外科医育成に尽力

私は平成9年に三重大学を卒業後、三
重大学第一外科に入局、医学博士を取得

金沢大学医薬保健研究域医学系肝胆膵・移植外科学教授に就任

後に京都大学に異動し、臨床では肝胆膵
癌治療及び肝移植診療に携わって参りま
した。金沢大学外科と三重大学、京都大
学とは第二外科ご出身の水本龍二先生
(三重大学元医学部長)、本庄一夫教授
(京都大学元教授)との繋がりがありご縁
を感じるところであります。研究として
はドイツRWTHアーヘン工科大学の実
験外科学教室に留学し臓器保存研究、そ
の他肝再生研究、胆道癌における患者腫
瘍同所性移植マウスモデル(PDOX)を
用いた胆膵癌研究、3D4K蛍光顕微鏡
開発(AMED 医工連携化事業)、サルコ
ペニア、腸内細菌叢などの研究も行って
きました。今後は金沢大学におきまし
ても、それらの研究を発展させて世界に
発信していきたいと考えております。

今回、金沢大学の消化器外科は肝胆

膵・移植外科と胃腸外科に再編されまし
た。我が国全体で外科医の減少が続いて
いる中で、金沢大学がアクティビティー
を維持して地域医療に貢献するためには、
若手外科医をリクルートできるか否かが
重要なポイントとなります。そのために
は大学での高度な医療(高難度手術並び
にロボット手術を見据えた腹腔鏡手術)
の推進とそれを担える外科医の育成実績
が重要で、同様な環境を関連病院で構築
できれば鬼に金棒となります。従って今
まで以上に大学病院と関連病院の前向き
な協力体制を構築すべく、胃腸外科と共
に持続可能な魅力ある体制を目指し、金
沢大学に貢献させていただきたいと存じ
ます。金沢大学及び十全同窓会の先生方
にはご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒
よろしくお願いいたします。



退職記念講演会

日時／令和2年12月7日(月)

場所／十全講堂 1階ホール

令和2年12月7日(月)、令和2年3月末日をもって医学系教授を退職された稲葉英夫名誉教授、太田哲生名誉教授、多久和陽名誉教授の退職記念講演会が十全講堂1階ホールにて開催されました。3月開催予定であったものの、新型コロナウイルス感染拡大の影響による延期から、9ヶ月を経た開催となりました。記念講演会において、稲葉先生は「地域集団基盤型研究が明らかにした院外心停止の予後改善のための方略とその効果」、太田先生は「Unmet medical needsに目を向けた外科医の挑戦」、多久和先生は「血管研究に導かれた新たな機能脂質とのめぐり逢い」と題して40年余にわたる研究・診療・教育および管理職としてのお仕事を振り返られました。記念講演会には多くの教職員、十全同窓会員、医学生がソーシャルディスタンスを保ちながら参加しました。

稲葉英夫教授は昭和54年千葉大学医学部を卒業され、千葉大学麻酔科に入局、救急センターにて研鑽されました。平成7年秋田大学救急医学講座教授に就任を経て、平成12年救急医学講座教授に就任し、金沢大学医学部附属病院救急部・集中治療部部長、救命センター長として活躍し多大なる貢献をされました。現在は船医としてご活躍とのことです。退職記念講演会では、病院前救急医療システムとメディカルコントロールの研究において、院外心停止や重症救急患者の予後に関連する因子の同定とその改善策の導入効果について熱く語られました。また、



先生は災害医療チームDMATとして、多くの災害医療支援にも貢献し、石川県MC協議会会長として、石川県内の救急隊員の活動内容の充実のための教育・研修に尽力され、石川県の院外心停止患者の1か月生存を日本のトップレベルに高めることに貢献されました。このような社会活動が総務省から認められ、令和元年救急功労者総務大臣賞を2020年9月9日に受賞されております。

太田哲生教授は、地元の石川県珠洲市に生まれ、昭和54年3月金沢大学医学部をご卒業され、金沢大学助手・講師・助教授を経て平成18年4月に消化器外科学教室の教授に就任されました。そして14年間にわたり教授としての職務を全うされまして、令和2年3月末に定年退職されました。現在は、湖南学院に勤務されています。太田先生は、教授在任期間中、医学類学生の教育や大学院生の学位取得のための研究に尽力してこられました。そしてこの14年間で48人の医局員が医学博士を取得し、Science・Art・Heartの3つを兼ね備えた優秀なacademic surgeonを数多く育てられました。また消化器外科医として、肝移植をはじめ、安全・安心で質の高い高難度手術を数多く指導しながら、消化器・救急領域における、いまだに治療法が見つからない難治疾患の病態解明にも

目を向け、その病態の解明と病態に基づいた先制医療の開発に力を注いでこられました。退職記念講演では、「核を持たない血小板はHE染色で存在そのものが見逃されている点に着目し、難治疾患の病態に間質内に逸脱した活性化血小板が深く関与しているに違いない」との仮説を立て、教室のスタッフが一丸となって研究に取り組んで導き出した「目から鱗の研究成果」について「Unmet Medical Needsに目を向けた外科医の挑戦」というタイトルでお話いただきました。



多久和陽教授は昭和54年3月に東京大学医学部を卒業後、東京大学医学部附属病院および分院で内科学、内分泌学の臨床研鑽を積まれた後、昭和60年1月より3年間アメリカ合衆国イェール大学医学部ハーワード・ラスムッセン教授の研究室に留学されました。帰国後、筑波大学代謝内分泌内科講師、平成3年より東京大学医学部寄附講座脈管病態生理学助教授、そして平成11年1月に本学第一生理学講座教授に着任されました。退職記念講演では、スフィンゴシン1-リン酸の受容体研究で、3種の受容体サブタイプが異なるシグナル伝達経路を活性化し、特に受容体サブタイプ特異的に低分子GタンパクRacを正もしくは負に制御することによって細胞遊走を促進あるいは抑制することをお示しになりました。

そして、先生は受容体やスフィンゴシン1-リン酸産生酵素の遺伝子改変マウスを樹立され、腫瘍血管新生や腫瘍増殖の抑制、血管透過性の抑制、心肥大や心筋線維化、血管リモデリングに関与することを解説されました。また、血管収縮機構の研究においては、Rho活性測定法を樹立され、血管平滑筋には受容体に共役する三量体GタンパクG12/13とは別にCa²⁺によるRho活性化機構が存在することを発見されました。また、先生は、管理運営面でも多大な貢献をされ、平成26年～30年に医学類長を、同28年～30年まで医学系長を併任され、医学類教育の諸改革、特に統合卒業試験の実施と卒業判定への利用、臨床実習72週化に向けてのカリキュラム改革、フィジシャンサイエンティスト育成を目指したMRTプログラムの立ち上げなどがあげられます。



素晴らしい最終講義を拝聴し、我々出席者は深く感銘を受けていました。まだ余韻の残る中、長年の功績をたたえ、盛大な拍手とともに花束の贈呈が行われました。先生方への感謝とともに、ご健勝をお祈りしたいと思います。

(杉山 和久：記)



受賞

秋の叙勲

上田 義博
(昭和40年卒業)

竹内 桂一
(昭和33年卒業)

瑞宝双光章

山本 誠
(昭和47年卒業)

勝田 省吾
(昭和46年卒業)

瑞宝中綬章

令和2年度 日本神経学会賞受賞

山田 正仁
(特別会員)

金沢大学医薬保健学域医学系
脳老化・神経病態学(脳神経内科学)

このたび、令和2年度日本神経学会賞(診療・教育部門)を受賞いたしましたので報告させていただきます。本賞は神経学の発展への多大な貢献に対し授与する賞で学術研究部門(若手対象)と診療・教育部門があります。

社会の超高齢化に伴い認知症は急増しています。受賞テーマの「認知症地域コホートと認知症プロフェッショナル育成プログラムの構築と展開」は、まさにそれに取り組む基盤をつくるためのものです。

七尾市中島町での認知症地域コホート研究(「なかじまプロジェクト」)は、私が2000年に本学に着任した直後から認知症の早期発見・予防を目的に計画し、2006年から調査を開始し継続しています。ありがたいことに、60歳以上の住民の90数%、すなわちほとんど全ての

方にご参加いただいています。その信頼性の高いデータは国の「認知症施策推進大綱」(2019)策定の基盤となりました。また、本コホートで認知症の遺伝的リスクを低減する食品因子を見出し、それを起点に日本医療研究開発機構(AMED)で認知症予防法確立のための研究事業を展開しており、その研究で10月に全米医学アカデミー(NAM)・カタリストアワードを受賞したところです。

認知症プロフェッショナルの育成プログラム(「認プロ」)は、文部科学省の支援を得て北陸の4大学と主要病院が中心となって2014年に開始しました。これまでに2000名以上の医師や看護・介護関係者などが北陸のみならず全国各地から参加し、eラーニングや毎月のWeb症例検討会などを続けています。「認プロ」を通して、認知症の専門家ばかりでなく、認知症診療・ケアに大切な専門診療科間、多職種間、地域における連携が育っています。

本賞は地域の住民や行政関係の皆様、地域で認知症に取り組む方々と共にいただいたものです。今後も、認知症が多発する超高齢社会の課題に取り組むたいと思います。一層のご指導・ご支援をお願いいたします。

令和2年度日本腎臓財団学術賞ならびに日本糖尿病合併症学会学会賞 (Expert Investigator Award)受賞

和田 隆志
(昭和63年卒業)

この度、令和2年度の公益財団法人日本腎臓財団学術賞ならびに日本糖尿病合併症学会学会賞(Expert Investigator Award)を受賞いたしましたので謹んで報告申し上げます。

本邦の慢性透析患者数は頭打ち傾向とはなつたものの、いまだに増加しています。新規透析患者の原疾患は糖尿病性腎症(糖尿病性腎臓病)が第1位です。高血圧症などが成因に関わる腎硬化症が第2位です。このため、超高齢社会を背景としたこれら疾病の予防、治療など、腎臓病克服に向けた総合的対策が強く求められています。

これまで我々は首尾一貫して、腎臓病、ことに糖尿病性腎臓病、腎硬化症、腎炎といった疾患の発症・進展機序などの病態解明を進めて参りました。さらに、病態に立脚し、発症・予後と相関する診断法・治療法開発についても、基礎的・臨床病理学的な視点から研究を行ってきた

した。この間、研究代表者を務めてきている厚生労働省やAMEDの研究班において、糖尿病性腎臓病・高血圧性腎硬化症の腎病理、検体の収集を伴い、病態解明や長期予後調査、新規バイオマーカー開発、国際比較が可能となるオールジャパン体制のコホートを整備し、研究基盤を拡充してきました。これらの成果は、糖尿病性腎症病期分類2014の改定への寄与、「糖尿病性腎症と高血圧性腎硬化症の病理診断への手引」、病期分類-病理-バイオマーカーを統合した「糖尿病性腎症病期分類に基づいた腎病理診断の手引き」等に結実し、臨床に還元することができました。今後も、病態解明、診断法・治療法の開発・臨床応用を通じて、腎臓病の克服に向け少しでも貢献できれば幸甚に存じます。

最後に、今回の受賞にあたり、かかる受賞は私一人で得られるものではないことを強く感じております。ひとえにこれまでの先輩、同僚、後輩の皆さま、国内外の共同研究者の方々のご指導とご支援の賜物と存じます。改めて心より御礼を申し上げます。引き続きまして、十全同窓会の皆さまの温かく力強いご支援を賜るとともに、ご高導、ご鞭撻のほど何卒宜しく願い申し上げます。

令和元年度 はあざみ賞若葉賞受賞

篠原もえ子

(平成12年卒業)

金沢大学附属病院
脳神経内科

この度、はあざみ賞若葉賞を受賞させていただきましたのでご報告いたします。はあざみ賞は前学長の中村信一先生が創設された「中村賞」を発展させ、金沢大学が教育研究の将来を担う女性研究者の育

成等に資することを目的として設けられた賞です。

私はこれまで、金沢大学脳神経内科教授山田正仁先生をはじめとする先生方のご指導のもと、七尾市中島町での認知症の早期発見・予防を目的とする「なかじまプロジェクト」研究に取り組んでまいりました。地域の公民館での脳健診(もの忘れ健診)に積極的に参加しない高齢者にも心理的負担が少なく自宅で気軽に検査を受けてもらえるよう、パソコンで認知機能検査が実施できる「タッチパネル式認知機能検査」を開発し、およそ2分で軽度認知障害(MCI)及び認知症の検出ができることを示しました(特許出願中)。また、なかじまプロジェクトでは、緑茶を毎日摂取する地域高齢者は摂取しない人と比べて約5年後の認知機能低下(MCIまたは認知症の発症)のリスクが約1/3に減少することや、アルツハイマー病発症リスクが高いアポリポ蛋白E遺伝子(アポE)E4アリル保有女性ではビタミンCの摂取が将来の認知機能低下のリスクを下げる可能性を報告してきました。

なかじまプロジェクト研究の成果を端緒とした「ポリフェノールによる認知症予防研究」やビタミンCがどのような機序でアポE E4保有女性の認知症リスクを低減させるのかを解明するための研究「アポE遺伝子型と性差に関わる認知症リスクを低減する食品関連因子の解明」が現在進行中であり、これら研究の着実な推進を通じて認知症予防・治療法の確立に資するよう努力していきたいと考えます。

今回の受賞にあたりご指導いただいた山田正仁教授をはじめ、共同研究の先生方にこの場を借りて深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう心よりお願い申し上げます。

令和2年度 はあざみ賞若葉賞受賞

井上なつみ

(平成20年卒業)

金沢大学附属病院小児科

この度、令和2年度のはあざみ賞若葉賞を受賞させていただきましたので、ご報告いたします。

私は2010年に金沢大学医学部医学科を卒業し、金沢大学小児科医局に入局しました。これまで、おもに小児のリウマチ膠原病疾患および小児腎疾患の診療に従事し、これらの疾患の病態解析を行って参りました。谷内江昭宏前教授、腎リウマチ膠原病グループの前チーフである清水正樹先生のご指導のもと、全身型若年性特発性関節炎(s-JIA)の病態におけるサイトカインプロファイルの解析を行い、そのパターンにより、同じs-JIAでも関節炎が優位な群と、マクロファージ活性化症候群を合併しやすい群に分類されることが明らかになりました。さらに、s-JIAと共通する臨床症状を呈する成人発症Still病(AOSD)のプロファイルを解析、s-JIA症例と比較検討し、両者は血清IL-18の著明高値を中心とした共通するプロファイルを有し、臨床的にもサイトカインプロファイルの観点からも共通した病態を有することを明らかにし、学位を取得させていただきました。そのほか、2011年に社会問題となった、焼き肉チェーン店での腸管出血性大腸菌O111による溶血性尿毒症症候群の重症例を担当したことをきっかけとし、サイトカイン解析や培養細胞を用いた病態解析等も行っていました。

2年前に第1子出産以降、時間の大切さを身にしみ感じておりますが、診療に加え研究面、教育面でも地道に活動を続けていきたいと存じます。

今回、はあざみ賞への応募をご推薦いただきました和田泰三教授をはじめ、こ

受賞

れまでご指導いただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。また、十全同窓会の先生方に置かれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

令和2年度日本整形外科学会 学術プロジェクト受賞

加藤 仁志

(平成13年卒業)

金沢大学附属病院リハビリテーション部
整形外科

この度、研究課題「内科慢性疾患の患者におけるロコモティブシンドロームおよび関連運動器疾患に関する研究」が令和2年度日本整形外科学会プロジェクトに採択されましたので、ご報告いたします。日本整形外科学会は25,000名を超える会員数を抱え、運動器(骨、関節、筋肉、神経など)の研究・医療の進歩や普及に取り組んでいます。平成16年度から将来性があり学会が推進する研究が、本プロジェクトとして2~4件採択され3年間の研究支援が得られます。

超高齢社会を迎えたわが国において、健康寿命の延伸は国民のQOL向上や社会保障費の削減に関わる最重要課題といえます。その中で骨折や関節の痛みを含む運動器の障害が近年は要介護・要支援の原因第一位となっており、その割合は年々増え続けています。本学会は要介護や寝たきりにつながる加齢に伴う運動器障害をロコモティブシンドローム(ロコモ)と提唱し、様々な疫学研究や啓発活動を行っています。当院では、ロコモの原因となる脊椎・下肢変性疾患の手術症例に対するロコモ評価や手術の改善効果を検証する前向き研究(日本運動器科学会プロジェクト)を全国に先駆けて実施しており、多くの研究成果を発表してい

ます。一方、糖尿病や慢性腎臓病などの内科慢性疾患の患者にはロコモが併存しており、その対策がQOL向上や病状改善に寄与する可能性があります。当院リハビリ部は内部障害に対するリハビリも積極的に実施しておりますので、これらの疾患に対しリハビリを処方された患者に対してロコモを含めた運動器評価を行い、両者の関連を調査し将来的には対策に向けての前向き介入研究を実施したいというのが本研究の目的です。

今回の受賞にあたり、ご指導いただきました整形外科教授の土屋弘行先生をはじめ教室の先生方、リハビリ部のスタッフの皆さまに深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう心よりお願い申し上げます。

第79回日本医学放射線学会 CyPos賞プラチナメダル賞

奥村健一朗

(平成21年卒業)

金沢大学附属病院
放射線科

この度、2020年(第79回)日本医学放射線学会CyPos賞プラチナメダル賞を受賞させていただきましたのでご報告いたします。この研究は「Gd-EOB-DTPA投与急性期に発生する呼吸乱れは薬理作用(副作用)の一種で脳に作用する」という臨床で想起された仮説を検証及び立証する動物実験モデルを用いたハイブリット研究で、これまでの造影剤に対する考え方を一変する金沢大学放射線科から発信した影響力のある内容となりました。しかし、これは当然、大勢の共同事業であったことを強く述べさせて頂ければと思います。まずは、中村病院、放射線技師の佐々木基充さんです。臨床現場

で実際に画像を撮影するのは放射線技師さんであり、それも単純な撮影屋ではなくリサーチマインドを持った方も多いです。佐々木さんもリサーチマインドを持った放射線技師でした。次に、大学院生の杉浦拓未先生です。大学院生は時間も多く、動物実験系手技に洗練していたので(当科には実験技師はおりませんので)、依頼して実験に同行させていただきました(この功績からこれは彼の学位論文として仕上がることになり、それは大変喜ばしい限りです)。臨床医は臨床と研究を両立していくのは至難で、しかも一人で行うと時間、精度の観点で徒勞に終わることが多くなります。しかし、多施設や多人数でしっかりイニシアチブがとられた状態で協力すれば、複数の成果も出しやすくなります。放射線科学教室は、北陸の病院と密に連携しイニシアチブがとれており、広く最新の知見を蓄積する研究体制があり、今後とも常に大学を中心に世界に発信することを行いつけてまいります。最後に、今回の受賞にあたり、腹部部門チーフ小林聡教授、蒲田敏文教授および諸先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後とも、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

令和2年度 日本関節病学会優秀論文賞受賞

上野 琢郎

(平成23年卒業)

横浜栄共済病院
整形外科

この度、令和2年度日本関節病学会優秀論文賞を受賞させていただきましたのでご報告いたします。この賞は日本関節病学会の機関誌である日本関節病学

会誌の中から1年に1編選出される賞であります。私は「人工股関節全置換術におけるIliopsoas impingementのrisk factorの評価」という論文を2020年度に掲載させていただき、受賞に至りました。

Iliopsoas Impingementとは人工股関節全置換術の術後合併症で、腸腰筋腱が寛骨臼カップと干渉することで、鼠径部痛を引き起こします。現時点でも明確な予防法がなく、最近の世界的トピックの一つであります。当科で人工股関節全置換術を受けた600人以上の手術データをまとめたり、画像解析を行うことは、とても時間と気力を要することだったため、賞を取ることができて大変うれしく思います。また、この論文を書き上げることができた背景として、当科で行われた十数年間のコンピューターナビゲーション使用下での人工股関節置換術のデータの蓄積があります。ご指導いただきました。金沢大学整形外科教授土屋弘行先生をはじめ、同准教授加畑多文先生、教室の先生方にこの場を借りて心より感謝申し上げます。また十全同窓会の先生

方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

第53回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会 優秀口演賞受賞

新村 和也

(平成30年度大学院修了)

地域未来医療整形外科学講座

この度、第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会において「脊椎全摘術後のinstrumentation failureに対するrevision surgery」という演題で優秀口演賞を受賞させていただきましたのでご報告いたします。

金沢大学整形外科教室では脊椎腫瘍に対して富田勝郎名誉教授が考案された腫瘍脊椎骨全摘術(TES)を積極的に行ってまいりました。近年ではそのTESに土

屋弘行教授が考案された液体窒素処理骨移植術を応用しTESの低侵襲化、免疫賦活化が進んでおります。しかしTESという手術は脊椎を1~3個まるごと切除するため脊柱はかなり不安定になります。前方は人工椎体、後方はスクリューとロッドで再建を行いますが、一定の確率で再建材料の破損(instrumentation failure)が発生します。Instrumentation failureが発生すると脊柱の不安定性が再度出現しますので再手術が必要となります。今回このinstrumentation failureに対する再手術法についてまとめたものを発表させていただきました。当科でのTESおよび液体窒素処理骨移植術の開発の歴史があったからこそ、この賞をいただけたと考えております。

今回の受賞にあたりご指導いただきました土屋弘行教授、名古屋市立大学整形外科村上英樹教授、金沢大学脊椎グループの先生方に深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

教授退職記念講演会のお報せ

謹啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます

さて金沢大学医薬保健研究域医学系(ウィルス感染症制御学分野)市村宏教授・金沢大学医薬保健研究域医学系(血液内科学分野)中尾眞二教授・金沢大学医薬保健研究域医学系(脳老化・神経病態学分野)山田正仁教授には令和3年3月31日をもって医学系教授を御退職されます

つきましては左記のとおり記念講演会を挙行することとなりましたので、ご案内申し上げます

令和3年1月吉日

謹白

金沢大学医薬保健研究域医学系長

杉山 和久

記

記念講演会

日時 令和3年3月10日(水) 午後3時から
場所 金沢大学宝町キャンパス 十全講堂1階ホール

(記念講演会後の記念式は行いません)

事務担当 医薬保健系事務部総務課総務係

(電話番号) 076-265-2100

医薬保健研究域AIホスピタル・ マクロシグナルダイナミクス研究開発センター 看板除幕式

日時／令和2年10月19日(月)

場所／医学類D棟6階

令和2年10月19日、医学類D棟6階にて金沢大学医薬保健研究域附属AIホスピタル・マクロシグナルダイナミクス研究開発センター(AI Hospital/Macro Signal Dynamics Research and Development Center)(略称:AI@KU)の看板除幕式が挙行された。

除幕式では、山崎学長、大竹理事、和田理事、大西理事、中村研究域長、崔センター長による除幕の後、山崎学長から、「医薬保健研究域の多様なデータサイエンスとAI技術を有機的に統合する

ことで、病気になる前のケアから予後管理までを含めたトータルシステムを確立及び人類の健康寿命を延ばすことを目的とし、さらに先の未来を見据えて、ポストSociety 5.0時代のヘルスケアを実現する研究基盤組織となることを期待します」と激励を込めたあいさつがあり、センター長をはじめ、出席した教員らは決意を新たにしました。

AI@KUは、ゲノムデータを含む医療ビッグデータ・AI・データサイエンス・計算科学を統合する新規研究・学術分野の創生と発展を目指すとともに、研究成果の社会還元から健康長寿社会モデルを提唱し、もって超高齢社会における超ス

マート医療の実現と持続可能な地域ヘルス・エコシステムを実現することを目指して令和2年9月1日付で設置されたもので、具体的な活動として、域内外、学内外、国内外の共同研究や産学官連携、社会還元を促進するために、学内の異分野融合セミナーや最先端のAIデータサイエンスの研究者の招聘セミナー等を開催し、学内の研究リソースやシーズ等の共有や社会ニーズの掘り起こしを行い、予算申請や外部資金の獲得、新たな融合学術領域を創生する基盤となることを目指す。

(崔 吉道：記)



金沢から世界へ発信

脳神経系の生い立ちをひもとく

金沢大学医学系脳神経医学研究分野

河崎 洋志

(特別会員)

はじめに

脳は身体の中で最も複雑で精密な臓器である。我々が人間らしい生活ができるのも、この脳の負うところが大きい。赤ちゃんの発生や動物の進化の際に、この精密な臓器が自然発生的にできてきたことは奇跡と言える。我々は、発生や進化の過程でこの脳が作られる仕組みを研究している。さらに得られた知見をもとに、疾患病態の理解や治療法の開発へと展開している。本稿では、我々のこれまでの研究結果を簡単にご紹介したい。

脳神経系の再生医学

ES細胞やiPS細胞は、身体の全ての細胞に分化できる未分化全能性幹細胞である。現在、ES細胞やiPS細胞を用いた再生医学的治療は大変に注目されているが、我々が研究を開始した1998年当時は再生医学という概念は確立されておらず、ES細胞(当時はまだiPS細胞はできていなかった)を培養して有用細胞へ分化誘導し、医療に応用するという研究は進んでいなかった。

脳はその発生に際して、多種多様な神経細胞を生み出す。多くの研究者がこれまでに、この多様な神経細胞の産生を制御する遺伝子群を報告していたことから、我々はこの情報を培養ES細胞に応用すれば、任意の神経細胞を自在に作製できるのではないかと考えた。

ES細胞の培養条件を検討した結果、SDIA法と名付けたES細胞から選択的に神経細胞を分化誘導できる手法の開発に成功した(Neuron 2000)。さらに、世界に先駆けて培養ES細胞からドーパミ

ン神経細胞、脊髄運動神経細胞、感覚神経細胞、網膜色素上皮細胞、大脳皮質神経細胞や皮膚細胞の作成に成功した(Neuron 2000; Nature Neuroscience 2005; PNAS 2002, 2003)。これらの成果は米国ABC Newsでも紹介して頂いた。

その後2006年にiPS細胞が作成されると、我々の方法を用いてiPS細胞からドーパミン神経細胞や網膜色素上皮細胞が作られ、現在 京都大学や理化学研究所で行われているパーキンソン病や加齢黄斑変性の患者への再生医療発展の端緒となった。さらに疾患iPS細胞と組み合わせられ、病態解析や薬剤開発へと広がっている。

高等哺乳動物の脳研究

従来、脳の分子生物学的研究は、遺伝子改変動物が使えるマウスを用いて主に行われてきた。しかし、ヒトに比べてマウスの脳は小さく構造的にも未発達であるため、我々はマウスを用いた脳研究には限界があり、ヒトとマウスをつなぐ動物が今後重要になると考えた。そこで、よりヒトに近い発達した脳を研究するためにイタチ科のフェレットに着目した。

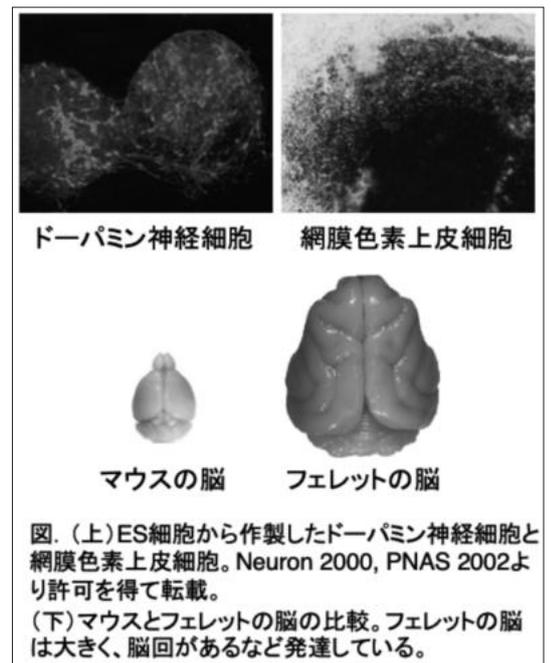
フェレットの脳はマウスの脳よりも大きく、大脳の表面にシワ(脳回)があるなど発達している。

まず、フェレットを用いた脳研究に必要な技術開発から始めた。フェレット大脳への遺伝子導入技術およびCRISPR/Cas9を用いた遺伝子ノックアウト技術を確立した(Cell Reports 2017)。この独自技術を用いてマウスとフェレットを比較解析した結果、これまで研究が遅れていた脳回の形成と進化に関わる分子機構を明らかにし(Cell Reports 2017; eLife 2017, 2020)、ヒトの脳へ至る道筋の一端が明らかと

なった。さらに、進化に関わる分子が異常になると多小脳回症や滑脳症が生じることがわかった。

さいごに

高等哺乳動物の脳を用いた分子生物学的研究は、脳の発生や進化のみならず、新規疾患モデル動物の作成など今後の発展が期待されている。実際に、我々のフェレットの研究技術について、米国、ドイツ、イタリア、フランスなどの研究グループから技術提供の依頼があり、共同研究が発展し論文になりつつある(Cell Stem Cell 2019; Cell Reports 2019)。今後はさらに、オリジナルな研究成果と技術を金沢から世界へ発信して参りますので、十全同窓会の皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。また一緒に研究するメンバーを受け入れていきますので、興味のある人は気軽にご連絡ください。最後に寄稿の機会を賜りました絹谷清剛教授および十全同窓会会報編集委員会の皆様に深謝申し上げますとともに、十全同窓会の皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます。



図。(上)ES細胞から作製したドーパミン神経細胞と網膜色素上皮細胞。Neuron 2000, PNAS 2002より許可を得て転載。
(下)マウスとフェレットの脳の比較。フェレットの脳は大きく、脳回があるなど発達している。

学会報告等

第32回日本神経免疫学会学術集会(JSNI2020)

日時/令和2年10月1日(木)、2日(金) WEB開催

令和2(2020)年10月1日(木)、2日(金)に金沢大学大学院脳老化・神経病態学(脳神経内科学)の山田正仁が会長を、金沢大学保健管理センターの吉川弘明が副会長を務め、「神経免疫学が拓く脳神経疾患診療の未来」をテーマとして第32回日本神経免疫学会学術集会(JSNI2020)をWEB開催いたしました。特別講演にはMayo ClinicのVanda A. Lennon教授、金沢大学の華山力成教授をお招きし、Lennon教授からは「The History of Autoimmune Neurology」と題して免疫性神経疾患における自己抗体発見の歴史やそれに伴う疾患の理解の変遷について最新の知見を交えてご講演をいただきました。また華山教授からは「細胞外小胞エクソソームによる神経免疫の制御機構」と題してエクソソームの神経免疫制御と神経変性疾患発症における役割について最新の研究成果につきご講演をいただきました。シンポジウムとして、「未来(30年後)の神経免疫疾患の治療」、「感染によって誘発される神経免疫病態」、「神経免疫と認知症・精神疾患」、「ミクログリア：基礎・臨床研究の最先端」の4つを、さらにホットトピックセッションとして「薬剤関連進行性多巣性白質脳症(PML)：多発性硬化症疾患修飾薬関連PMLを中心に」(日本神経感染症学会との合同企画)を取り上げました。

本学術集会は未曾有のコロナ禍によりWEB上での開催となりました。企画プログラムおよび一般演題のすべての口演についてWEB上でプレゼンテーションされ、視聴者はチャットを用いて質問を

投稿することで、リアルタイムでの質疑応答を行うシステムとしました。またすべてのポスター演題についてもチャット機能を用いて質疑応答が行われるようにしました。WEB開催は本学術集会では初めての試みであり、配信トラブルやセッション進行の不具合など様々な懸念事項がありましたが、幸い大きなトラブルはなく、570名余りの方にご参加いただき活発な討議が行われました。なおライブ配信の様子は10月6日(火)～31日

(土)の間、オンデマンド配信いたしました。

このウィズ・コロナ時代を契機に今後ますます学術集会のWEB化が進むものと思われます。本学術集会がその先駆けとしてひとつの形を提案できたこととすれば幸いです。最後になりましたが学術集会成为成功裡に終えることができましたのも、ひとえに皆様のお力添えの賜物と、心より感謝申し上げます。

(山田 正仁：記)

The 32nd Annual Meeting of the Japanese Society for Neuroimmunology (JSNI2020)

第32回 日本神経免疫学会 学術集会

会期) 2020年10月1日(木)・2日(金) WEB開催 (LIVE)

URL: jsni2020.jp

[演題募集期間]2020年4月15日(水)～6月2日(火)正午

会場：金沢市文化ホール WEB開催特設サイト(URL:jsni2020.jp)

会長：山田 正仁 (金沢大学大学院脳老化・神経病態学(脳神経内科学) 教授)

副会長：吉川 弘明 (金沢大学保健管理センター)

2020.10.1-31F
オンデマンド配信

【特別講演】
The History of Autoimmune Neurology
Professor Vanda A. Lennon (Mayo Clinic, USA)
細胞外小胞エクソソームによる神経免疫の制御機構
金沢大学大学院脳老化・神経病態学(脳神経内科学) 教授 華山力成

【シンポジウム】
1. 未来(30年後)の神経免疫疾患の治療
2. 感染によって誘発される神経免疫病態
3. 神経免疫と認知症・精神疾患
4. ミクログリア：基礎・臨床研究の最先端

【ホットトピックセッション】
薬剤関連PML: MS系修飾薬関連PMLを中心に

【臨床教育講演】
オンライン学習/教育能力
神経免疫疾患スベクトラム障害/AgG4関連疾患

【教育委員会セミナー】ほか

学術集会事務局：金沢大学大学院脳老化・神経病態学(脳神経内科学) 〒920-8642 石川県金沢市田町1-3-1 E-mail: jsni2020@med.kanazawa-u.ac.jp
運営事務局：株式会社ネクスターツ 〒920-0059 石川県金沢市田町1-3-1 TEL: 076-216-7000 FAX: 076-216-7100 E-mail: jsni2020@nexstage.com

第61回日本神経病理学会総会学術研究会(JSNP2020)

日時/令和2年10月12日(月)~14日(水) WEB開催

令和2(2020)年10月12日(月)~14日(水)に金沢大学大学院脳老化・神経病態学(脳神経内科学)の山田正仁が会長で、副会長を金沢大学大学院脳・脊髄機能制御学(脳神経外科)の中田光俊教授にお務めいただき、第61回日本神経病理学会総会学術研究会(JSNP2020)を開催いたしました。当初は2020年6月に金沢市文化ホールで開催させていただく予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大のため、完全WEB形式で学術研究会を開催いたしました。日本神経病理学会としては初の試みでしたが、合計で538名に参加登録をいただき、盛会裏に学術研究会を終えることができました。

今回の学術研究会では、「神経病理を学ぶ、活かす、極める」をメインテーマとし、神経病理学に関するすべての領域について、初心者が脳の見方を学び、神経病理学の成果や方法を診療や研究に活用し、専門家が神経病理学を一層深めることができるような、教育企画、シンポジウムおよび特別講演を開催いたしました。

特別講演ではドイツTübingen大学のMathias Jucker教授に「Early changes in Alzheimer's disease: pathogenic seeds and fluid biomarkers」の題名でご講演いただきました。シンポジウムでは異常蛋白の伝播や脳の腫瘍性病変と非腫瘍性病変の境界、タウオパチー、脳の間質液や脳脊髄液の排出系と神経疾患に関して最新の知見が報告され、事前録音した講演動画の配信後に、チャット機能

を利用してリアルタイムで参加者との活発な討論が行われました。

一般演題では136演題(口演11演題、eポスター125演題)を応募いただき、口演以外はeポスターのWEBでの閲覧とチャット機能を用いた質疑応答が行われました。各カテゴリーではコメントーターを1名ずつお願ひし、活発な議論が行われました。

10月12日~14日のライブ配信の記

録は10月19日~11月16日の間オンデマンド配信し、「少しずつ見られるので勉強になる」と好評でした。

本学術研究会の開催にあたっては金沢大学脳神経内科の教室員のご協力をいただきました。また、皆さまのご支援で実りのある学会になりましたことに深謝いたします。

(山田 正仁:記)

第61回 The 61st Annual Meeting of the Japanese Society of Neuropathology

日本神経病理学会総会 学術研究会 JSNP2020 Kanazawa

【会期】
2020年6月25日(木)~27日(土)
WEB開催(LIVE) 10月12日(月)~14日(水)
オンデマンド配信 10月19日(月)~11月16日(月)

会場: WEB開催特設サイト URL: jsnp2020.jp
会長: 山田 正仁 金沢大学大学院脳老化・神経病態学(脳神経内科学)
副会長: 中田 光俊 金沢大学大学院脳脊髄機能制御学(脳神経外科)

神経病理を
学ぶ、活かす、極める

[Special Lecture]
Early changes in Alzheimer disease pathogenesis:
Pathogenic seeds and DIAN
Professor Mathias Jucker (University of Tübingen, Germany)

[実習セッション] 初心者、医学生歓迎!
神経病理を学ぶ(1): 脳・神経病理学の見方、教えます!
金沢大学大学院脳脊髄機能制御学 教授 高柳 孝一
神経病理を学ぶ(2): 代表的な疾患の脳を自分で見てみよう!
高橋市広道、日本スライドから画像転写でもつたる教習講座

[シンポジウム]、【ホットトピック】、【ワークショップ】、ほか

学術研究会事務局: 金沢大学大学院脳老化・神経病態学(脳神経内科学) 〒920-8640 石川県金沢市東町1-1 E-mail: jsnp2020@nissansuwa.uak.jp
印刷事務局: 株式会社ネクスタック 〒920-0609 石川県金沢市東町1-1 TEL: 076-216-7000 FAX: 076-216-7100 E-mail: jsnp2020@nissansuwa.uak.jp

病院紹介

独立行政法人 地域医療機能推進機構 金沢病院

社会保険病院として 設立され発展

当院は終戦間もない昭和22年に金沢市大樋町に設立された社会保険鳴和総合病院がルーツであり、地域に密着した病院として発展してきました。この時代の経営主体は社団法人全国社会保険協会連合会(全社連)で、公設民営の病院として診療に加えて健診業務にも注力し活動してきました。そして病院の発展とともに施設の老朽化と狭隘化が顕著となったため平成11年4月に金沢市沖町に新築移転し、病院の名称も金沢社会保険病院に変更となりました。院内の診療スペースは約3倍となり、外来患者や入院患者が増え職員のモチベーションも向上しました。また金沢大学からもいくつかの診療科に新たに医師を派遣していただき、病院の発展にますます加速度がついた感がありました。さらに新築移転と同時に老健施設が併設され、ここに急性期医療、予防医療そして福祉・介護事業という体制が確立しました。

社会保険病院からJCHOへ

一方この頃、健康保険や厚生年金保険の財政悪化が問題となり、また全国社会保険病院や厚生年金病院の厳しい運営状況と併せ、平成14年頃より両病院グループの整理統合が国会で議論されるようになりました。最終的に地域の医療体制を守るためとして平成26年4月、47の社会保険病院と7つの厚生年金病院に加え3つの船員保険病院の計57病院が一緒になり独立行政法人地域医療機能推進機構(JCHO)が誕生しました。一方JCHO誕生の経緯から独立採算制の運営が厳しく求められ、補助金は一切なしで安定した経営が最重要課題とされました。幸い当院の経営は現在大変良好な状態ですが、これから超がつく高齢化社会の到来を思うと今から自院の立ち位置を考えていく必要性を肝に銘じているところです。

未来を見据えて

最近の大きな出来事としてまず令和元年9月の厚労省による「424リスト」の公

表が挙げられます。今後の地域医療の指針を示したものとしてはいささか乱暴に過ぎる感はありましたが、しかしどの病院にとっても自院の在り方を問い直すきっかけになったと思います。加えて令和2年春からの新型コロナウイルスの感染拡大は病院運営を直撃しました。受診抑制により外来、入院共に大きく減少し、病院の収支は大きな赤字を記録しましたが、果たしてポストコロナの時代にどうなっているか不安は尽きません。一方で当院は県の求めに応じて感染患者の受け入れを積極的に行ってきましたが、幸い風評被害は全く認められず、逆にスタッフの中に地域に貢献するという機運が高まり一体感が醸成されました。この二つの「大事件」により我々は、今後の道のは決して平坦なものではなく自身で切り拓いていくしかない、と覚悟が深まったと感じました。この難局に率先して立ち向かってくれた医局員は全員金沢大学の医局出身者です。これからも金沢大学と十全同窓会の皆様のご支援をお願い申し上げます。

(院長 村本 弘昭：記)

概要

独立行政法人地域医療機能推進機構 金沢病院
所在地 石川県金沢市沖町ハ15番地
病院長 村本 弘昭
病床数 248床
(内、地域包括ケア病棟53床)
診療科数 16

沿革

昭和22年1月 金沢市大樋町に社会保険鳴和病院として開設
平成11年4月 金沢市沖町に新築移転
金沢社会保険病院と改称
平成26年4月 独立行政法人地域医療機能推進機構金沢病院となる

国家公務員共済組合連合会 横浜栄共済病院

沿革

金沢市から400km以上離れ、国内で最も大きな自治体である横浜市の南部医療圏に当院はあります。人口12万人が居住する栄区で唯一の急性期型総合病院、診療圏は隣接する鎌倉市、戸塚区、港南区に広がります。旧海軍共済病院としての端緒を持ち、創設81年となる当院が金沢大学関連病院となったのは地域医療の病院に転換した後の1953年です。爾来67年間医師の派遣、診療・研究面の指導をいただき、現在も診療科長級以上の医師30名のうち19名が金沢大学医局出身であり、金沢ことばが院内に飛び交っています。

当院を取り巻く状況

横浜の医療環境を一言で表すならば「多様性」にあると思います。当院にも多彩な経歴や出自の職員が在籍しており、獣医から転身した臨床工学士や外語大スペイン語科卒業の看護師、JAL国際線勤務歴のある職員などと毎日顔を合わせています。当院の医師の一部は他大学医局からも派遣を受けており、看護師などのコメディカルスタッフも北は北海道、

南は九州沖縄まで広い地域から入職してきます。コロナ禍で減少したものの、街でも公共交通機関でも国外から来られた人々に会います。

横浜市内134病院のうち当院のような連合会系病院は2病院で、様々な開設基盤の病院があります。最も多いのは9病院の医科中グループで、次いで5病院の自治体病院、3病院の済生会病院、これ以外にも掖済会や多数の民間病院があります。横浜市内への医師派遣を担う関連大学としては横浜市大からの派遣が多いものの、東京医科歯科大、慶応大、東邦大、昭和大、聖マリアンナ医科大、北里大などの多くの大学から派遣されています。

横浜市内で医療を行うことはある意味では異種格闘技を毎日行うようなものであると言われる。そのような側面があることは間違いないのですが、161年前の開港時に100軒足らずの漁村が370万人の大都会となったように、この土地は新参者を温かく迎えるダイバーシティ感に満ちています。

リニューアル工事の完成

当院では地域の医療需要の増加を見越

して10年前からリニューアル準備を開始し、5年間かかった工事を2019年11月に終えることができました。「地域医療を次のステージ」というフレーズの元に、旧病棟の60%を解体して、建物面積は1.3倍としました。それまでのうっそうと木々が生い茂った広い敷地内に低い建物が群立する構成から4つの病棟に集約し、正面に150台収容の駐車スペースを持つ病院は横浜市内には稀です。がん拠点病院指定要件を整備するために放射線治療を新たに開始し、がん化学療法室を拡充しました。行政からの要請により分娩を再開し、横浜市長の謝儀訪問を受けています。工事完成とCOVID-19に関する地域貢献が評価され、連携申し込みが増加して登録医療機関数は500クリニックを超えています。鎌倉市と戸塚区の中小病院群とは定期的な連携会議を持ち、さらに介護施設、地域ケアプラザなどと顔の見える関係作りを進め、二重、三重の連携ネットワークを作り上げました。当院は金沢大学とは距離的には遠いのですが、そのスピリットを失うことなく地域医療に力強く貢献しています。

(院長 細川 治：記)

概要

国家公務員共済組合連合会 横浜栄共済病院
所在地 神奈川県横浜市栄区桂町132番地
開設 1939年7月
病院長 細川 治(2009年より)
病床数 許可病床430床(一般412床、集中治療室12床、脳卒中集中治療室6床)
診療科数 32
病院理念 やすらぎと質の高い医療をこころのこもった技術で届けます

沿革

1939年 大船海軍共済組合病院として現在地に開設
1945年 終戦に伴い大船共済病院に名称変更
1950年 国家公務員共済組合連合会傘下となる
1953年 金沢大学関連病院となり大石太郎院長就任
1986年 栄区が戸塚区から分区したことにより横浜栄共済病院に名称変更
2019年 病院リニューアル工事完成

教室だより

人体病理学

病理学は全身の臓器・疾患を対象としますが、当教室は肝臓病理学を専門とし、肝胆道系疾患に重点を置いた研究を行っています。

研究

肝胆道系疾患の病理・病態を解明し、診断や治療など臨床医療に貢献できる研究を目指しています。さまざまな疾患を研究対象としていますが、ここでは自己免疫性肝炎と胆管癌について紹介します。

自己免疫性肝炎では、原発性胆汁性胆管炎(PBC)と自己免疫性肝炎(AIH)を中心に研究を行っています。最近の研究成果として、PBCの胆管病変の形成における細胞老化およびオートファジーの関与を明らかにしたことや、AIHに関する全国調査で急性肝炎様に発症したAIHに特徴的な病理所見を見出しました。また、免疫チェックポイント阻害薬による肝障害の病理に関する検討も進行中です。

病理学の研究は免疫染色標本などの顕微鏡的な観察が基本となりますが、最近「病理系の医学雑誌であっても免疫染色のデータだけでは論文がなかなかアクセプトされない」といった声をしばしば耳にします。当教室では従来の実験手法に加えて、新しい技術であるシングルセル解析を駆使してPBCの病態解析にもチャレンジしています。

胆管癌については2019年にWHO消



化器腫瘍分類が改訂され、病理学的な疾患分類に変更がありました。肝内胆管癌は肝内での発生した部位により large duct type と small duct type に2分類され、胆管癌の前癌病変である胆管内乳頭状腫瘍(IPNB)と胆管上皮内腫瘍(BilIN)の概念についても変更がありました。このWHO分類の改訂に準拠しつつ、胆管癌と前癌病変の特徴をさらに解明すべく分子病理学的な検討を進めています。胆管癌の微小環境に着目した研究や免疫チェックポイント阻害薬の効果予測マーカーに関する研究も行っています。

教育

医学類3年生の「病理学Ⅱ」の講義と実習を担当し、「基礎研究室配属」を分担しています。病理学は基礎医学と臨床医学の橋渡的な領域であり、3年生が基礎から臨床へと円滑に移行していけるように臨床的な内容を交えて分かりやすい講義を心がけています。その他、1年生「初学者ゼミ」、4年生「栄養・消化器学」、修士課程「人体の正常と疾病」、博士課程「up to dateセミナー」「メディカルサイエンスセミナー」を分担し、MRTプログラムにも参加しています。

現在、全国的に病理医の数は不足しています。この傾向は病理診断学より実験

病理学(研究)の分野において顕著であり、多くの大学の病理学教室で人材不足が現実問題となっています。学生教育にあたっては病理学や研究が面白いと感じ、将来の進路の候補の一つにあげてもらえるような工夫と努力をしています。

診断

日常の業務として常勤病理医が不在である北陸のいくつかの病院の病理診断を行い、地域医療に貢献しています。また、分子細胞病理学(旧第一病理学講座)と協力して附属病院の病理解剖を担当しています。肝胆道系疾患の病理診断では、診断困難症例について全国からコンサルテーションを受け付けています。

おわりに

小さな規模の病理学教室ですが、わが国の、さらには世界の肝臓病理学をリードする教室となること、そして魅力的な教室であり続けることを目指して原田教授の指導の下、教室員一人ひとりが日々研鑽を積んでいます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後とも温かいご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

(佐藤 保則：記)

スタッフ

教授 原田 憲一
 准教授 佐々木素子、佐藤 保則
 助教 山村美奈子
 大学院生5名、技術補佐員3名、事務補佐員1名、
 MRT学生4名

研究分野の沿革

本教室は1926年に初代教授として杉山繁輝先生が就任し、第二病理学講座として発足しました。杉山教授の後、石川太刀雄丸教授、太田五六教授、中沼安二教授へと受け継がれ、先生方のご尽力により教室が発展してきました。2014年に第5代教授として原田憲一先生が就任し現在に至ります。講座名は2001年の大学院部局化に伴い形態機能病理学、2016年に人体病理学へと改称しています。

小児科学

診療

当教室は、北陸における小児医療の中心施設であり、県内外から多数の患者さんが受診されています。小児科の対象領域は幅広く、免疫・アレルギー、血液・腫瘍、循環器、神経・遺伝、腎・膠原病・消化器、内分泌・代謝、未熟児・新生児の各班に分かれ、専門性を発揮しながら協力して診療にあたっています。他科との連携は不可欠であり、特に小児外科とは新生児の外科疾患や医療的ケア児の処置等で緊密な協力体制をとっています。また最近、小児心臓血管外科が設置され、他施設に心臓手術を依頼せざるを得ない状況が改善されました。当院は日本で唯一、神経芽腫に対してMIBG大量療法を核医学と連携して行っており、全国の難治例が紹介されてきます。さらに医療の進歩に伴い、成人期に達した患者さんが多くなってきており、成人科と連携を取りながら移行期医療を円滑に進めていくことが求められています。

教育

卒前卒後の教育では、忙しいと敬遠されがちな小児科の魅力を積極的に伝えていきます。小児科学は、胎児期から出生後の成長発達の上に、各臓器に渡る多様な疾患を含んでおり、臨床ならびに研究において大変魅力ある分野であること、子



ども達のために働ける小児科医の喜びは何ものにも代えがたいことを伝えていきます。約10年前より学生に対して、シミュレータを用いた小児救急の遠隔教育をフィラデルフィア小児病院と協力しながら続けており、自発的学習やチームワーク向上に繋がっています。昨今のCOVID-19流行に伴い導入されたオンライン授業の先駆けとも言え、今後も発展させたいと考えています。子ども達健康を守る大切さを伝えるために、教室員全員で教育に力を入れています。

研究

各班がそれぞれの専門領域において、さまざまな研究を進めています。免疫・アレルギー班では、原発性免疫不全症などの免疫異常症に加え、消化管アレルギーやEBウイルス感染症などを対象に病態解析や新規診断法の開発などを行っています。血液・腫瘍班では、造血細胞移植における移植片対宿主病の制御や血液疾患に対する遺伝子治療などを研究しています。腎・膠原病班ではバイオマーカーを用いた小児腎疾患やリウマチ疾患の病態解析などを、神経・遺伝班では小児神経疾患の早期治療介入に向けた髄液サイトカインの動態解析などを行っています。循環器班は培養細胞を用いて、高

濃度の二酸化炭素が血管に対して及ぼす影響などを解析し、内分泌・代謝班はI型コラーゲンに着目した小児易骨折性のリスクなどを検討しています。未熟児・新生児班は、精神科と共同して早産児の発達評価などの研究を行っています。このように遺伝子解析や細胞表面抗原解析、ELISA、免疫染色から、動物実験、ウイルスベクターを用いた遺伝子導入まで多岐にわたる手法を駆使し、各班が連携しながら基礎と臨床を繋ぐ研究をさらに進めたいと考えています。特に細胞解析やサイトカイン解析では、北陸のみならず、全国から症例の相談や解析の依頼が数多く寄せられています。

おわりに

当教室の最大の使命は、石川県内のみならず、北陸、そして全国の子どもたちを「元気」にすることです。そのためには、教室員が「元気」でなくてはならず、そして活躍しなければなりません。大きな教室ではありませんが、全員一丸となって、診療、教育、研究分野で活躍できるよう精進してまいります。十全同窓会の諸先生におかれましては、今後とも温かいご指導を賜りますよう、何卒、よろしくお願い申し上げます。

(伊川 泰広：記)

スタッフ

教授 和田 泰三
 特任教授 谷内江昭宏
 准教授 太田 邦雄(医学教育研究センター)、伊川 泰広(医局長)
 講師 三谷 裕介
 助教 東馬 智子、岡島 道子、黒田 文人(外来医長)、
 横山 忠史、井上なつみ
 特任助教 黒田 梨絵、藤木 俊寛(病棟医長)、中村 太地、
 中村 美穂、岩崎 秀紀、松田 裕介
 医員13名、大学院生18名、事務補佐員3名、技術補佐員2名

研究分野の沿革

当教室は、1924(大正13)年に泉仙助先生が金沢医科大学小児科専任教授に就任し開講されました。1970年代に各専門研究グループの礎が築かれた後、第4代教授谷口昂先生時代に教室は免疫学を柱に大きく発展しました。これまでに数多くの優秀な人材が北陸をはじめ全国各地に輩出されています。2019年に第7代教授和田泰三が就任し、現在に至っています。2024年に小児科学教室は百周年を迎えることとなります。

同窓生の消息

第39回日本思春期学会・学術集会 開催報告

金沢医科大学・産科婦人科主任教授

笹川 寿之

(昭和58年卒業)

令和2年9月17日(木)～23日(水)にわたり日本思春期学会・学術集会をWeb開催いたしました。思春期学とは8歳から18歳までの人たちの精神・身体・性の発達とそれらに関する健康問題を扱う学問です。

今回のテーマは「思春期から考える将来の健康問題」です。成人病やがんの発生をどのように予防するかは医学における重要なテーマです。医学の進歩により、これらのうちいくつかの疾患は予防可能になりつつあります。しかし、それを有効にするためには様々な分野の協力が必要です。

産婦人科領域では、若い女性の子宮頸がん死亡率が増加しています。このがんを予防できるヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチンの接種は定期接種化されたままですが、ほとんど接種されていません。将来の本疾患の増加が危惧されます。本学会では、HPVワクチンの効果が世界中で示されていること、報道されたような重篤な副反応は実際には起こりえないことが明らかになりました。思春期のやせは妊婦の低体重の問題につな

がります。これは生まれてくる子供の将来の成人病発症に影響します(DOHaD学説)。多くの女子が経験する月経痛の陰に子宮内膜症が隠れており、これは将来の不妊症、卵巣がんの原因であるため、低用量ピルで予防すべきです。これらの内容を含むプレコンセプションケア教育を、今、最もホットな話題として取り上げました。子供たちの心を育む教育、思春期の精神疾患や心身症、インターネットの問題、学校における性教育のあり方、などに関する話題も取り上げました。

特別講演では、羽咋市妙法寺の僧侶、たかのじょうせん高野誠鮮先生に「ローマ法王にコメを食べさせた男；スーパー公務員と言われた男の失敗履歴」という題名で、高齢化で崩壊寸前の農村をどのようにして復活させたのかという自伝と自然農法について語っていただきました。

コロナ禍のさなかでのWeb開催でしたが、参加者は700名を超え予想以上に盛況な会となりました。多大なご支援をいただいた関係者に、心より感謝を申し上げます。



高野誠鮮先生



笹川 寿之

医学教育研究寄附金

ご寄附をいただきました。本学類、系が行う教育・研究にご賛同賜り、深くお礼申し上げます。

蘇原 博史

(昭和35年卒業)

山本 純夫

(昭和27年卒業)

竹内 正和

(昭和24年卒業)

Student Doctor 認定証授与式

令和2年11月26日、系統試験や共用試験を無事に終えた私たちは、Student Doctor認定証授与式の日を迎えました。杉山医学類長からStudent Doctor認定証を受け取った時、医師になるスタートラインにようやく立てた気がしました。

杉山先生をはじめ、諸先生方からお言葉を賜り、Student Doctorも医療チームの一員として、患者さんのために日々努力していくことが求められると感じ、身が引き締まる思いです。これまで私たちは、教科書を読み、先生方の講義を聴き、試験を受ける、いわゆる座学を中心に医学を学んで参りました。この12月からは、臨床実習の場において実際の患者さんの前に立つこととなります。

ベッドサイドの患者さんから学ばせていただくことは、教科書や講義で得た知識よりも、より実際的なものだと思います。まさに「百聞は一見に如かず」ですが、この言葉には続きがあることを最近知り

ました。「百聞は一見に如かず、百見は一考に如かず、百考は一行に如かず、百行は一果に如かず、百果は一幸に如かず、百幸は一皇に如かず」(聞くだけでなく実際に見るほうがよい、見るだけでなく考えるほうがよい、考えるだけでなく行動するほうがよい、行動するだけでなく結果が出なければ意味はない。結果を出すだけでなくそれを自らの喜びとしたい、自分だけではなく周囲全体の喜びが最も大切)だそうです。

症候、身体所見、検査結果など、初歩的なところから、現在の私の知識では到底太刀打ちできないことだらけでしょう。毎日のように新しい発見があるのでは、と考えると、心躍る思いですが、まずは「目の前の患者さんに全力を尽くす」、これが私の臨床実習に向けての目標です。五感を研ぎ澄ませて、目の前の患者さんに全力を尽くすことの積み重ねが、良医に近づく道だと信じています。

私たちの実習にご協力いただく先生方、コメディカルの方々、大学・病院職員の方々、そして何より患者さんへの感謝と敬意の気持ちを持って、また、家族や友人をはじめ、これまで私を支えてくださった全ての方々に、一人前の社会人・医師として成長した姿を見せられる日を目指して、病棟実習の日々を大切に過ごしていきたいと思います。皆様、今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、昨今のコロナウイルス禍の折、細心の注意を払いながらStudent Doctor認定証授与式を開催していただいた先生方、学務課の方々、関係者の皆様のお心遣いに4年生を代表して厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

(医学類4年 安部丈太郎：記)



十全昔話

社会のためになるよう 役割をもって生きる

金城 國昭

(昭和31年卒業)

私は昭和25年戦後沖縄からの最初の留学生として新制金沢大学(2期)の一般教養部理学部乙類(医進コース)に入学しました。当時沖縄は米国の占領統治下であり日本本土への渡航は極度に制限され、本土大学への進学も閉ざされていました。琉球政府より日米両軍の烈しい地上戦で廃墟と化した沖縄の復興には人材育成が急務である事を米国民政府に強く訴え漸く昭和25年から米国及び日本への留学制度が発足しました。

幸い私は第一回の日留選抜試験に合格、パスポート、検疫証明書等を持参、船便で上京し文部省で金沢大学配置を告げられました。

数日後文部省の係官付添で上野駅からSLの夜行列車に乗り翌朝金沢駅に着きました。当時は約8時間を要したと思いますが現在北陸新幹線で東京-金沢間が約2時間半と聞くと将に隔世の感がします。駅には大学本部の学生係長稲葉先生が迎えて下さり旧金沢城の懐真寮に案内され入寮しました。寮は元第九師団の古めかしい木造2階建ての兵舎、ここで教養部の2カ年を過ごしました。各県から集まった寮生たちは多士済々、個性豊かな若者達で中には旧制四高生もおりのグループは夜になると時々ストームをして「北の都」、「南下軍」等の寮歌、応援歌を放歌高唱、氣勢を上げていましたが私も度々誘われて参加しました。沖縄では今でも毎年「寮歌祭」があり私達金大OBも「四高・金沢大」の幟を掲げ、「北の都」、「南下軍」を定番に他校に負けじと蛮声を張り上げています。

教養部の文系講義は城内キャンパスの校舎で理系講義は旧四高の赤レンガ校舎で受けました。教授陣は(敬称略)英語

(山本)、独語(秋山、小島)、化学(岩崎)、物理(吉村)、数学(翠川)、生物(川島)の諸先生でした。それぞれ名講義でしたが私には難解、単位を取るのがやっとでした。何故か英語山本教授の「アミエルの日記」は今でも印象に残っています。

教養部2カ年の課程を終えると当時は改めて医学部入学試験があり何とかパスして小立野の旧医大校舎に通学することになり退寮しました。

学部に進学すると講義は皆出席を心掛けましたが部活にも精を出し、合唱部(看護学校学生も一緒)で歌ったり、洋楽部でバイオリンを習ったり、スポーツはバレー部に入って西医体の徳島大会に出場、ついでに四国を一周し高知市でクラスメイトの深瀬兄の実家に泊めていただき高知城や桂浜の坂本龍馬像を見学しました。

学部の教授陣は(敬称略)解剖(佐口、大谷)細菌(谷)寄生虫(渡辺)生理(斎藤)公衆衛生(石崎)衛生(大谷)生化学(岩崎)病理(宮田、石川)、法医(井上)臨床は内科(谷野、日置)、外科(ト部、熊埜御堂)小児科(泉)皮膚泌尿器(川村)産婦人科(笠森)放射線(平松)精神科(秋元)耳鼻科(松田)眼科(倉知)整形(高瀬)、結研(岡島、柿下)の諸先生だったと記憶しています。解剖学佐口教授のチョークの板書は芸術的で今も同窓生の語り草になっているし、生化学岩崎教授のアゾトメトリ、ドイツ留学時代の話、泉教授の「泉熱」に特徴的にみられるというピロチット(ビールス細胞)の連呼は今でも時々想い出します。

学3、学4の2夏は「白山診療班」の一員として参加しました。標高3千メートル近い白山頂上から眺めた日本アルプ



ス、雲海、ご来光等の景観は南国育ちの私にとって神秘的、感動的な体験でした。学4夏休みの後半は、安藤兄と共に氷見厚生病院(現金沢医科大学氷見市民病院)で約3週間見学、実習をしました。院長は、外科医の木元正二先生(医大、昭和16年卒業)、元軍医、豪快な先生で診療が終わると時々医局で地酒を戴きながら四方山話を聞かせていただきました。私は主に産婦人科の小川鎮男先生(医専、昭和24年卒業)について分娩介助や、手術助手に入りました。中でも「帝切」は、娩出された新生児が元気な産声を上げると周りが歓声を上げ祝福するというドラマチックなオペであるのを目の当たりにし、そのことが後日私が産婦人科を志す動機になりました。

学生時代、地方の小、中病院で臨床の實際を体験することは非常に有益で、学生の皆さんもぜひこうした機会をつくることをお勧めします。

ところで、学期が始まると講義の合間に「白山診療班」で一緒に津川先輩(元金沢医大泌尿器科教授、現十全同窓会会報学外編集委員)に誘われて石川教授の病理学教室に入出入りして抄読会に出席したり実験の手伝いをしたことも懐かしい思い出です。

津川先輩には学生時代大変お世話になりましたが、後年私の甥が、金沢医大泌尿器科学教室に入門させていただきご指導を受け現在金沢市内の病院に勤務していますがこれも不思議なご縁だと有難く思っています。

インターンは全寮制で給与も支給される高待遇に惹かれ桑原兄(元金沢医大産婦人科教授)と2人東京の立川共済病院に応募、採用され上京しました。

当直が多く各科をローテイトするER方式のハードな研修でしたがその時得た総合診療医的な知識は後日開業医になった時大変役に立ちました。インターンを終えて医師国試を済ませると琉球政府の要請もあり法医学教室に入門して井上教授のご指導を受け解剖資格を取得して帰郷、琉球政府警察局長の法医学担当医官として法医解剖、検案、鑑定等の業務に従事しました。検案は現在も警察嘱託医として続けておりこうした長年の警察医活動に対し、平成18年に警察庁長官賞、平成20年秋の叙勲で瑞宝双光章を頂き光栄に思っています。

検案は、資格不要、医師でもあれば誰でも可能な業務で依頼があれば会員の諸先生方も嘱託医を引き受けてほしいと思えます。

警察局長勤務の4カ年の任期を終えると改めて沖縄赤十字病院産婦人科に入局し日赤中央病院から派遣されたU部長の下で4カ年研鑽を積み、35歳の時那覇市で開業、当時は医療機関も少なく多くの患者さんが来院され日夜診療に奮闘しました。ご存じのように産科は緊急帝切や分娩時出血等の急変に常時対応できる体制が必要で、また“新生児取り違い”防止に細心の注意を払うなど、気の休まる暇もないハードな毎日でした。50代後半になると体力の限界を感じ61歳で閉院、その後は老健施設で約20年勤務、現在は同法人の病院でパート医として訪問診療に従事しています。

医師になって62年、その間数多のヒヤリハットはありましたが、大過なく診療に従事できたのは多くの方々のご助力のお陰であり、感謝の念で一杯です。私は、今年米寿を迎えました。少しでも社

会のためになる役割をもって生きるのが私のモットーで、後しばらく仕事を続けられたらと思っています。

十全同窓会沖縄県支部について

私が昭和36年帰郷した時のOBは、開業医の渡慶次先生(医大、昭和23年卒業)と2人でしたが、本土復帰の昭和47年頃から次第に会員も多くなり、昭和57年会則を作り正式に支部を結成、初代支部長は私が引き受け、2代目大浦孝(昭和46年卒業)、3代目上原元(昭和50年卒業)、現在4代目を知念弘(昭和57年卒業)が担当しています。

毎年2月末に支部総会を催し、会員相互の親睦と交流を計っていますが、最近十年間は本部から理事の先生が交代で参加されるようになり、令和2年の総会には同窓会会長の中村信一先生(現名誉会長)が遠路出席され、母校の近況報告とご専門の細菌学レクチャーをしていただき、大変有意義な会でした。

現在の会員数約40名。「医は十全を以って上となす」を肝に銘じ各々の職場で日々精励しています。

以上取り止めのない駄文をつづりました。又学生時代のことは半世紀前以上の事で記憶も定かでなく誤りがあるかもしれませんが、その点ご了承いただきたいと思えます。

最後に母校及び同窓会のご発展と、コロナ禍で大変な時世ですが、同窓会会員諸先生方のご健勝・ご多幸を祈念して筆を擱きます。

学生課外活動報告

白山診療班

白山診療班は昭和28年に発足した歴史ある団体であり、60年以上の間、標高2450mにある白山室堂ビジターセンター内の診療所において体調を崩した登山客や室堂スタッフへの診療を行ってまいりました。そこで学生は白山の自然を満喫するだけではなく、実際の患者さんへの問診や、医師の指導のもとで手技を行うという貴重な経験をすることができます。しかしCOVID-19の影響により、残念ながら白山診療班は今夏白山での診療活動を行うことができませんでした。そこで今回は、私の今の思いを述べることをもって活動報告とさせていただきます。

現在の白山診療班にはCOVID-19の影響による人員不足という大きな課題があります。現在、来年度の学生活動について、1～3年は厳重な感染防止策のもとで一部認められています。しかしながら、4～6年は病院での臨床実習のため原則、課外活動が認められておりません(令和2年10月現在)。つまり、活動規制が続く場合は臨床知識の浅い低学年が中心となって診療所を運営していかなければなりません。

また、人数不足に加えてさらに懸念すべき点があります。それは、来年度は白山への登山客増加が予想され、その分診療所を訪れる患者さんも増える可能性があるということです。今年はCOVID-19の流行により、多くの観光客が登山を自粛していました。今夏に自粛で外出できなかった分、来年の夏は白山登山客が増加するかもしれません。その場合、このままだと臨床知識の浅い低学年中心で運営していかなければならない分、診療所の機能維持に大きな支障をきたす可能性があります。医師や、臨床知識のついた4～6年生のいない状況で診療所を運営するのは厳しいと考えます。

診療所に常に医師が常駐することが困難な中、我々医学生が戦力として期待されています。しかし上記の現状のまままだ

と、診療所を運営できなくなる可能性があります。山における怪我や病気の治療ができなくなってしまいます。診療班の人員不足と来夏の観光客増加という難局を乗り越えるために、ぜひとも十全同窓会の先生方や観光協会の皆様のお知恵を拝借し、観光客の方々が安心して登山ができる環境を整えていきたいと考えております。

最後になりますが、十全同窓会の皆様より白山診療班の活動のご支援を賜り、誠にありがとうございます。今後ともご協力のほどをよろしくお願いいたします。そして、大変厳しい状況の中、COVID-19の治療にあたってくださる十全同窓会の先生方や全国の全ての医療従事者の方々に感謝申し上げます。

(医学類4年 水倉 俊行：記)



お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について、
寄稿をお待ちしております。

〒921-8640 金沢市宝町13-1
金沢大学医学部十全同窓会 会報編集委員会
TEL. 076-265-2132
FAX. 076-234-4208
Email juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

立山診療班

富山県東部にそびえる立山連峰は、北アルプス北部に位置する標高3000メートルの天上界で、年間約100万人もの観光客が訪れます。私たち立山診療班は7月下旬から8月下旬の約1カ月の間、立山で起こる登山客や観光客の疾病や事故に対し、富山県警察山岳警備隊、周辺の山小屋や環境省の方々のご協力のもと、山岳診療所にてボランティアで診療活動を行っています。室堂・雷鳥沢・剣沢の合計3カ所の診療所には、夏休みの1カ月間に、例年百名ほどの患者さんが受診されます。

毎年、60名ほどの学生が参加し、医師の指導の下で診療活動にあたっています。本年はCOVID-19感染防止のためビデオ会議ツールを用いた勧誘も導入し、13名の新たな班員が加わりました。しかし、残念ながら診療活動への学生の参加は見送られることとなりました。そのため、OB・OGを中心とした十全山岳会が室堂・剣沢診療所をみの運営を行い、人員不足のため雷鳥沢診療所の開設は断念しました。

例年、学生は自分達で患者さんに問診をとり、医師の指導の下に対処したりしています。また、仲間との散策や談

笑、炊事の協力など登山ならびに山小屋生活を満喫しています。このような実際の臨床の現場を体験し、患者さんに接する、さらに仲間と時間を共有できる立山診療班は学生にとって貴重な体験の場です。来年度以降の活動再開が待ち遠しいところです。

ここで、本年度の十全山岳会主導による診療所開設にあたり実践された感染対策について少しご紹介いたします。受診希望者は原則として受診前に電話連絡を入れていただき、玄関で体温測定と簡便な処置もすることで三密回避に努めました。幸い富山県の協力も得られ、消毒液やガウンなどの感染防御品も確保できました。そのためCOVID-19が否定的であれば個人用防護具(PPE)装着のもと、必要に応じて診療所内での処置も行うなど安全に医療活動が行えました。

この会報をご覧の診療班卒業生の皆様も、学生時代を思い出しつつ避暑がてらにでも参加していただければ幸いに思います。今夏もCOVID-19感染が拡大していたにも関わらず、例年通り20名ほどの先生方が参加され診療にあたられました。しかしながら3つの診療所を抱える立山の診療には、より多くの先生方のご協力が必要だと感じております。もしご興味がありましたら、立山診療班 kum.tateyama3015@gmail.com までご連絡ください。先生方と山小屋で一緒にできる日を心待ちにしております。

最後になりましたが、OB・OGの先生方をはじめ、活動を支援してくださった皆様、十全同窓会の皆様のお陰をもちまして、本年度の活動も無事に終えることができました。厚く御礼申し上げます。

(医学類5年 奈須 仁克：記)





部活動を振り返って

医学類4年

細川 祥太

十全同窓会の皆さま、明けましておめでとうございます。医学類4年の細川祥太と申します。今回、十全同窓会会報の学生コーナーに執筆させていただけることに恐縮する反面、大変嬉しく思います。私は金沢大学に入学して3年半が経ちました。その3年半の中で特に思い出がある部活動について自分が思うことを書かせていただきたいと思っています。拙い文章ではございますが、ご一読していただくと幸いです。

私は現在、金沢大学医学部卓球部に所属していますが、中学校と高校は陸上部に所属していました。まずは、中学校と高校の頃、私がどのように部活動をしていたのかを書かせていただきます。

当時、私の中学校の陸上部は、野球などの学外のスポーツクラブに所属する人が多い部活動でした。そのため、日々の部活動の参加は自由な感じでした。部活動内では毎日参加する部員とそうでない部員が半々くらいでした。私は後者でした。また、活動自体も私は友人としゃべってばかりで、練習は手を抜いてやるが多かったです。

高校時代も練習日、時間を自分たちで決める自由な部活動でした。私は2年生の後半あたりから段々と受験勉強にシフトしていき、ほとんど練習せずに3年生の最後の大会に臨みました。当然、練習をしてなかったので結果を残せず、引退しました。

大学に入学すると各部活が盛んに新歓をしていましたが、私は新歓に全く行かず、家でゴロゴロしているばかりでした。そうして半年が経ったとき、私はふと中学校、高校時代の部活動を思い出しました。そのとき、「もっと真面目に部活動をしていればよかったな」と思いました。このまま部活動に入らず大学生活を終えてしまうのは駄目だと思い、途中入部することを決めました。どの部活動に入ろうか考えたとき、高校時代よく友人と卓球していて楽しかった思い出があったため、卓球部に入部しようと思

いました。途中入部を断っている部活動も多い中、卓球部は快く入部を承諾してくださいました。卓球のことが全く分からない私に、ラケット選びから打ち方まで、色々なことを教えてくださいました。私も次に入ってくる新入生が分からないことがあって困っていたら先輩方のように教えていきたいと思いました。

私が2年生のとき、部員の数少なかつたため私は部活の幹部の一員となりました。その中で特に大きな仕事だったのは2年生の終わりに主管を務めた西日本医歯薬学生卓球大会でした。先輩の的確な指示のもと、私は仕事をしました。50大学ほどが参加する大きな大会を、後輩にも指導しながら回っていてとてもすごいなと思いました。私が3年生になってからも大会の主管が予定されていたので、自分はこの先輩方のようにうまく回せるのかとても不安でした。

私は3年生になったと同時に主将となりました。そして夏に、北陸の4大学の医学部卓球部が集まる卓球大会の主管をしました。自分が中心として準備をしましたが、各大学への連絡、トーナメント作成、会場設営などやるべきことがたくさんあって頭がパンクしそうでした。先輩方があんな大きな大会を回していたのに自分はこの小さな大会もうまく回せないのかと悲観的になりました。しかし、先輩方や、後輩、OB、OGの方々の手助けもあってなんとか無事に終わることができましたが、自分的に反省するべき点はたくさんありました。その反省を生かせる場が、3月にもう一度主管する大会があったため、次はもっとスムーズに主管をしたいと思いました。私たちの部活動は3年生の3月いっぱいまで幹部交代だったため、この大会主管が最後の大きな仕事のひとつでした。

来る3月の大会主管に向けて部員一丸となって準備を進めていた矢先、COVID-19が猛威を振るい始めました。大会を3月上旬に予定していましたが、金沢でも感染者が出始め、各大学の主将や部内で話し合った結果、大会1週間前に中止を決定しました。その後の会食などがすべて中止となり、私の主将としての仕事は終わり引退しました。

そのような形で引退してしまいましたが、私はやりきったと思うことができています。

まともに部活動に参加せず、試合でいい結果が残せなくても涼しい顔をしていた中学校、高校時代に比べ、毎回部活動に参加して大会でも勝てるようになったこの2年半はとても充実していました。また、今までリーダーというものになったことがなかった私が主将となるのはとても不安でしたが、1年間主将として多くのことをさせていただきました。前述した大会主管の他にも、OB・OGの方々と会食の準備、司会など多くの仕事を通じて様々なことを学ばせていただきました。この経験は大学卒業後も生きてくると思うので主将をすることができてよかったと思っています。

4月以降も半年間部活動を禁止され、練習の成果を発揮する場である西医体も中止となってしまいました。10月から感染対策を講じた上で、徐々に部活動が再開され始めました。しかしながら、大会が開催される目処が立っておらず、なんのために練習をしているか分からないと思う人もたくさんおられると思います。また、1年生も大学入学して部活動をどうしようかととても困惑していると思います。中には部活動に入らない、部活動を辞めるという人もいます。しかし、私は部活動はしたほうが良いと思います。部活動をしていれば、楽しいこと以外にも仕事や人間関係などで大変なことは多いと思いますが、学ぶことがとても多いと思うからです。手を抜いてやっても後に残るものは少ないので、勉強も部活動も一生懸命することが大事ということを私はこの大学に入学して改めて学ばせていただきました。

最後になりましたが、私たちがこうして勉強や部活動などの学校生活を送ることができているのも先輩方が代々引き継いでこられ、また多くの方々から支援していただいているおかげだと思っています。12月から臨床実習も始まります。多くの方々の支えがあって学ぶことができていますということを忘れず頑張っていきたいと思っています。

連絡先の変更・ご異動の際は、 金沢大学医学部十全同窓会 会員情報変更サイトをご活用ください

URL <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member>

2021年名簿改定作業を再開します。

ご不明な点は下記事務局へご連絡ください。

TEL : 076-265-2132

Email : juzen@med.kanazawa-u.ac.jp



会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。

会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。

①自動引き落とし(手数料本会負担)

本年度より取り扱いを開始いたします。お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛お知らせください。

折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。

是非この機会にご検討くださいますようお願いいたします。

②払込用紙(手数料本会負担)

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。

③銀行ネット決済(ネットバンキング)

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。

(お振込の際は、ご氏名の前に会員番号のご入力をお願いいたします)

北陸銀行 小立野支店

普通預金 6051047 金沢大学医学部十全同窓会 会費口

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局

TEL : 076-265-2132 FAX : 076-234-4208 Email : juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

寄附制度のご案内(金沢大学医学教育研究支援寄附金)

近年、国立大学法人の改革強化・促進が国の施策として急速に進められる中、医学類・医学系においても、実施すべき事業が次々と生じております。本来ならば、これらの事柄は大学の予算により実施すべきところですが、昨今、本学の財政状況は逼迫しており、部局に対して十分な予算措置が行われない状況です。

医学類・医学系としては、自助努力の方策を模索せざるを得ず、その一環として、平成26年9月に本学類・系が行う教育・研究に役立つことを目的とした「金沢大学医学教育研究支援寄附金」を起ち上げ、支援事業を推進して参りました。

本学の医学教育研究のさらなる充実発展のため、同窓会会員の方々におかれましては、今後とも格別の御支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

金沢大学 医薬保健学域 医学類長
医薬保健研究域 医学系長
杉山 和久

【担当(お問い合わせ先)】

〒920-8640 金沢市宝町13-1 医学類B棟1F

金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係

Tel : 076-265-2115

E-mail : t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

【お申込方法について】

- ・ 電子メール又は電話でのお申込み

上記担当まで電子メール又は電話にてご連絡ください。折り返し、申込書を送付させていただきます。

現金のお持ち込みにより、ご寄付いただくこともできますが、その場合も上記方法によりあらかじめご連絡いただけますと幸いです。

【税法上の控除について】

- ・ 寄附者が個人の場合は、所得税法上の控除対象となる寄附金として、確定申告の際、所得から控除され、税法上の優遇措置を受けることができます。また、石川県内在住者の寄附は、石川県や県内市町村からの個人住民税の控除を受けることができます。(※所得税法、地方税法ともに2千円を超える寄附額から控除対象となります。)
- ・ 寄附者が法人の場合は、法人税法上の全額損金算入が認められる寄附金として、法人の所得から控除でき、税法上の優遇措置を受けることができます。

nihon
medi+physics

for the happiness



明日の幸せを願い、「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、がん治療用の医療機器、治療薬などの創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代) <https://www.nmp.co.jp/>

 日本メジフィジックス株式会社

2020年6月作成

ホテル日航金沢

城下町・金沢を彩る”舞台”という発想のホテルです。
地上30階、高さ130mは北陸随一のスケールを誇り、多彩で充実した施設と
きめ細やかなおもてなしで皆様をお迎えいたします。

一期一(縁)のおもてなし。

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1(JR金沢駅兼六園口前)
Tel: 076-234-1111 Fax: 076-234-8802

ホテル日航金沢 検索 www.hnkanazawa.jp

会報編集委員の紹介

学内編集委員(13名)

蒲田 敏文
中村 裕之
横山 茂(副編集委員長)
絹谷 清剛(編集委員長)
篁 俊成
和田 隆志
佐々木素子
谷口 巧
山本 靖彦
中田 光俊
倉知 慎
毎田 佳子
濱口 儒人

学外編集委員(21名)

山口 成良
津川 龍三
赤祖父一知
佐藤 保
三輪 晃一
橋本 琢磨
中村 信一
勝田 省吾
山本 健
山本 博
山岸 正和
太田 哲生
大村 健二
横山 仁
大島 徹
横山 修
中本 安成
常山 幸一
古川 健治
若山 友彦
中西 清香

以上34名で構成されています。

土屋弘行十全同窓会理事長には、
編集委員会にご参加いただいております。



表紙の写真

地中海コス島をイメージした「宝の島」

医学の父ヒポクラテスの生誕地であるコス島(ギリシャ)をイメージしたオブジェ「宝の島：尊い命の原石を求めて」は、金沢美大生とのコラボ作品。外来と病棟をつなぐ中庭に設置されています。

題字：山本 健(十全同窓会会長)

発行：金沢大学医学部十全同窓会
会報編集委員会
〒920-8640 金沢市宝町13-1
<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

発行日：令和3年1月18日

印刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

第170号から本同窓会報の紙面を刷新し、このスタイルがすんなり皆さんの懐に入ようになったと思います。これを実施するにあたっては、先輩諸氏からおしかりを受けることを覚悟しておりましたが、心配は危惧と過ぎました。

数号前から、受賞をされた先生方のご紹介を積極的に掲載するようにしています。以前から、叙勲はむろん、それ以外では学会賞のような大きな賞を掲載するにとどまっていたのですが、学内外の若手研究者の受賞掲載などを始めたところ、毎回多数の報告をいただくようになりました。また、金沢から世界へ発信というコーナーを立ち上げ、研究を紹介していただくことを始めました。これらを拝読するにつけ、本学の先生方が頑張っておられる様をまざまざと知ることができ、私自身、非常に刺激を受けています。若い人たちが、これらの記事に接して発憤し、立派な仕事に繋げてくれることを期待します。

コロナ禍はまだまだ収まらず、皆さんフラストレーショ

ンが溜まっていることかと思えます。ワクチンが広く普及するまで、しばらく時間がかかりそうです。政府は経済を回すことと、感染を押さえ込むこととの相反する施策を実施しようとはしますが、どちらを重要視しても非難の声が生じています。マスメディアは視聴者を諭すこともせず、ただただ怨嗟の声を垂れ流しているように感じるのはい私だけでしょうか。マスメディアの取材に対して、金沢は感染者が少ないからGoToを使ってきました、と感染者が多い地方から来た人がおっしゃっていました。海外と比べ、日本で感染者数・死亡者数が圧倒的に少ないのは、ファクターX故なのかもしれませんが、マスク・手洗い等々を心がけ、周囲に迷惑をかけないように心がけたからだと思えます。海外の方々とメールのやりとりをしていると、末尾にStay safeとありますが、いま日本で必要なのは、Stay wiseかと。

(絹谷 清剛：記)